

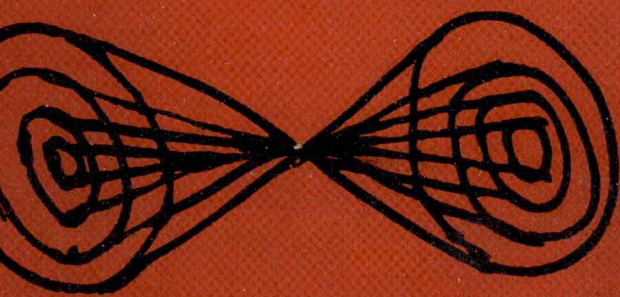
グモ

リ
ー

ンム

世界文學大系

80



モ　ー　ム

お菓子と麦酒　雨　赤毛
奥地駐屯所　物知り博士

グ　リ　ー　ン

事件の核心

上田　勤・中野好夫
西川正身・伊藤整訳

世界文學大系

60

筑　摩　書　房　版

世界文学大系 60

モ ー ム
グ リ ー ン

昭和36年7月25日発行

定価 450 円

訳者代表 伊 藤 整

発行者 古 田 晁

印刷者 山 元 正 宜

発行所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話 (291) 局 7651

目次

モーム

お菓子と麦酒

雨

赤毛

奥地駐屯所

物知り博士

グリーン

事件の核心

サマセット・モーム

グレアム・グリーンと責任

解説(モーム)

(グリーン)

年譜

上田 勤訳

中野好夫訳

中野好夫訳

西川正身訳

西川正身訳

伊藤 整訳

ジョン・プロウフィ

青木雄造訳

R・M・アルベス

青木雄造

381 377 372 361 352 189 182 161 147 120 5

裝
幀
庫
田
發

モ

丨

ム

お菓子と麦酒

序

わたしが最初この小説を考えたのは短篇小説としてであって、ひどく長くなるとは思わなかった。ここにわたしがこの小説をはじめて考えたときのノートがある。「ある有名な小説家の追憶記を書いてくれと頼まれる。彼はわたしの少年時代の友人で、素性のいやしい女と同棲してMに住んでいる。女は彼に対して不貞をはたらく。彼はすぐれた小説を書く。後に彼は自分の女秘書と結婚する。彼女は彼を護って有名人に仕上げる。晩年、彼が老境にはいったときに、有名人にまつりあげられることに對して、腎の下が少しもこそばゆかないものだろうか、どうだろう? そのへんを書いてゆく。」そのじぶんわたしは、「コスモポリタン」誌のために、一連の短篇小説を書いていた。その約束は、千二百語から千五百語くらいのもので、挿絵を入れても雑誌一ページにおさまるように、というのであった。だが、わたしは多少のわがままを許してもらっていたので、そういう場合には、

挿絵が二ページにまたがり、わたしに約束以上のゆとりを与えてくれるのだった。はじめわたしは、この小説をそのほうに使うつもりで、とっておいた。もともとロウジーという人物は、そのだいぶまえから、わたしの心のなかにあったものである。こういう女をいつかは書いてみたいと、この数年間考えていたのだが、機会が熟さなかった。つまり、どんな枠にはめこんでならびたりするものか、そのへんの工夫がつかなかったのである。それで、あるいはこのままお流れになるかもしれないとも考えたが、それもよからうぐらしいの気持でもあった。作家の脳裡にある人物は、まだ書かれないあいだは、自分の持ち物みたいなもので、絶えず心がそこへかえてゆく。そして、いろいろと想像でその人物を潤色してゆくときに、作家は、自分の心のなかである人間がいろいろさまざまな、わくわくするような生活を営んでいる、ある場合には自分の空想のままに動くようでもあるが、ある場合には妙にわがままで、自分とはまったく離れているようでもあるといったふうな感じのなかで、不思議な喜びを感じるものなのである。これが一度その人物が紙の上に書かれてしまったとなると、もう作家のものでなくなってしまう。作家はその人物を忘れてしまう。長年心になかに宿って、おそらくはいろいろと空想をたくましくさせたであろう人間が、こうまでみごとにいなくなってしまうものなのだろうか。まことに不思議なことである。それはそれとして、

さっきもいった、わたしが心覚えに書きとめておいた短篇小説の荒筋が、かねてわたしが探しあぐんでいたこの人物にびったりはまる枠であるのではなからうかという考えが、とつぜん、わたしの心に浮かんだ。そうだ、この女をその有名な小説家の細君にしよう。そうなること、とても二千語やそこらでは書けないことがわかったので、わたしはもう少し待ってみて、あの『雨』を追いかけるようにして出して、世評も悪くなかった一万四千か五千語ぐらいの、ずつと長いほうの小説の材料に使ってやろうと決心した。しかし、考えれば考えるほど、わたしのロウジーをその程度の小説に使ってしまうのは、だんだん惜しくなった。いろいろと昔のことが思い出されてくるし、ノートに書いたWについても、それは『人間の絆』のなかでわたしがブラックスティブルと呼んだところだが、わたしはいいいたいことを、まだみんないっていないのに気がついてきた。もうずいぶん昔のことだから、事実をもっと明らかに書いていけないわけはないだろうと考えたりもした。こうして、ブラックスティブルの教区長ウィリアム伯父と彼の妻イザベラは、牧師ヘンリ伯父と彼の妻ソフィになり、『人間の絆』のフィリップ・ケアリは『お菓子と麦酒』の「わたし」になったのである。

書物が出たとき、わたしはエドワード・ドリッフィールドという人物のなかで、トマス・ハーディを描いたというので、いろいろな方面か

ら攻撃された。これはまったく身に覚えのないことである。わたしの心のなかにはハーディはもちろん、ジョージ・メレディスも、アナトール・フランスもなかったのである。ノートを見てもだいたいはわかるように、年齢にも名声にも不足のない一人の作家が受けなければならぬ崇拝というものが、彼の空想がつくりだす冒険をまだ生ま生まと感じる力のある彼の鋭い魂にとつて、うるさくないものかどうか、わたしにはそのへんのが面白かったのである。おそらく表面は讃美者たちが要求するもったいぶつたようすを保ちながらも、心のなかは妙に落ちつかない考えがそれからそれへと横切るに相違ないと思つたのである。『ダーヴアーヴィル家のテス』はわたしが十八のときに読んで夢中になり、おれは乳しぼりの女と結婚するんだと考えたりしたものだが、その他のハーディの作品には、その頃の他の人たちとは違つて、わたしはたいして感心しなかつたし、彼の英語もたいていよいとは思わなかつた。ひところわたしはジョージ・メレディスに心酔したこともあり、その後になつてアナトール・フランスに熱中したこともあるが、ハーディにはそれほどの興味を感じたことがなかつた。だいいちわたしはハーディの生涯についてほとんどなにも知らなかつた。今でもせいぜいハーディとエドワード・ドリッフィールドと、この二人の生涯の共通点がごくつまらない二、三の点だけであることを判断しうる程度に知っているにすぎない。二人

とも貧困のなかに生まれたこと、二人とも再婚したこと、共通点というのはいささかそれくらいである。わたしはトマス・ハーディに会つたことが、たつた一度ある。それはサン・テリエ夫人の晩餐会のときで、この夫人は当時の社交界ではジュース夫人といったほうが通りのよかつた人で、なんらかの点で世間の注目を浴びた者なら誰でも邸へ招待することの好きだった人である。(当時の社交界の貴族的だったことは、こんにちの社交界の比ではなかつたのだが。)當時わたしは戯曲家として人氣もあり、流行尼であつた。それは大戦前にはおりおり見られたすばらしい大晩餐会で、料理の皿数もたいへんなものであつた。濁つたスープに、すんだスープ、魚、盛合せ料理二皿、シャーベット(これは食欲を新たにするためのもの)、骨つき肉、粥でつめた鳥獣の肉、甘いもの、水菓子、辛い味のつまみもの等。客は二十四人、それぞれに階級なり、政治上の地位なり、芸術的な業績なりで有名な人物ばかりであつた。婦人連が客間へ退いたとき、わたしはわたしの席がトマス・ハーディの隣であることに気がついた。土くさい顔の、小さな男だったことを、わたしは今でも憶えている。夜会服、胸のころの固いワイシャツ、それに高いカラーをつけてはいいたが、そのようすにはどこか土の匂いがただよつていた。彼は愛想がよく、おとなしかった。はにかんだようすと、自信ある態度と、この二つが妙にこんがらがつていたのが、はっきりわたしの

印象に残つた。何を話したか今では忘れてしまつたが、四十五分くらいはしゃべつていたと思う。そのあげくに、彼はわたしに非常な敬意を表した。というのは、彼はわたしに(わたしの名前を聞いていなかったものとみえ)ご職業はとずねたものであつた。

作家のなかにはオルロイ・キアという人物のモデルにされたと思つてゐる人たちも二、三はあるとのことである。それも彼らの誤解である。この人物はいろいろな人たちの性格を寄せ集めてつくれた人物である。ある作家からは風采、ある作家からは上流社会憧憬病を、ある作家からは明けつ放しな態度を、さらにある作家からは運動競技自慢を借りてきた。わたし自身もずいぶんとはいっているのである。元來わたしは自分のおかしな性格を突き放して見ることできる人間で、わたし自身のなかにもずいぶんと笑うべきものを発見するのである。おそらくはそのためになつたしは(もしわたし自身のこととしばしば人から聞いたり、読んだりしていることが本當なら)、このような不幸な癖をもつていない他の多くの作家たちにくらべて、かなり冷たい光で人間が見れるのであらうと考えている。元來われわれが創造する性格は、すべてわれわれ自身の分身にすぎないものである。だから、もちろん、一般の作家諸君はわたし自身などよりもはるかに高尚で、利害にとらわれず、有徳で、精神的であるのかも知れないわけである。彼ら自身が神様みたいであるからして、彼

らの創造する人間も神様みたいになる、これは至極当然なことである。わたしが作品の販路を増すためにあらゆる広告戦術をもちいた一人の作家を描こうと考えたとき、なにもある特定の人間にわたしの注意を集中する必要はなかったのである。こうした例は世間にざらにあることで、なにがしかの共感をそれに対して感じない作家は一人もないはずである。毎年、何百かの書物、それも非常にすぐれた書物が認められないで消えてゆく。どれにしたところが、それを書くのに数カ月を要したのであり、あるいは数年間も脳裡を去来したのかもしれないのである。彼はそのなかに彼自身の一半を注ぎこんだ。それが永久に失われてしまうのである。批評家の机に山と置かれ、書店の棚がしなうほどにうず高く積まれるその混雑にまぎれて、それが空しく顧みられないで終わる機会のいかに多いことか。考えるだに肌粟を生ずる思いがする。彼が世間の注意をひくためにあらゆる策略を弄することは、なんの不思議もないのである。どうすればよいか、それは経験が教えてくれる。世間的な人物にならなければならぬ。絶えず世の中の目にたつようにしなければならぬ。つとめて記者にも会い、新聞に写真が載るようにしなければならぬ。「タイムズ」紙に手紙を書き、会合の席では演説をし、社会問題に興味をもたなければならぬ。晩餐会では卓上演説を欠かしてはならない。出版屋の広告文のなかで書物の提灯持ちをしなければならぬ。然る

べきときに、然るべき場所にならずいるようにしなければならぬ。自分を忘れさせては絶対に駄目である。これは困難な、気骨の折れる仕事である。ひとつ間違ったら、もう取り返しのつかないことになるかもしれないからである。このようにして世間の人々たちを説得して、彼が本心から一読の価値ありと考えている書物を読ませようと苦心惨澹する作家を、好意ある目で見てやらないうのは、あまりにも冷酷無情な仕打ちであらう。

しかし、わたしが慨嘆に堪えない広告戦術が一つある。それは書物を出版するために催されるカクテル・パーティーである。まず写真屋の出席を確保する。つぎにゴシップ欄担当の記者や、知っているかぎりの有名人を招待する。ゴシップ欄担当の記者は彼らの欄に記事を書いてくれる。絵入り新聞は写真を出してくれる。ところで、有名人たちは、署名入りの書物を無料でもらうつもりである。この薄汚い行為は、たとえ表向きは出版屋が金を出して催すのだということにしても（ときにはもちろん実際そのとおりのことでもあるだろうが）、不愉快なことはやはり不愉快である。わたしが『お菓子と麦酒』を書いた当時は、こうした会合はまだ流行していなかった。流行していたなら、面白い一章をもうけるくらい材料はあったのだろうが。

一

かねてから気がついてきたことだが、誰かが留守中に電話をかけてよこして、帰って来たらすぐに電話をかけてくれ、大切な用件なんだからと言伝てておくような場合には、その用件というのは、むしろその男にとって大切なので、われわれにはあまり大切でない場合が、かなり多いものである。これが贈り物でしようとか、恩にきせてやろうとかいうような場合だと、たいていの人はそう無茶なあて方ではないものである。こういうわけで、わたしは晩餐の着がえをするまえに一杯飲つて、ひと休みし、新聞を読むくらいの時間はあるだろうと思つて下宿へ帰り、おかみさんのフェロウズさんから、オロロイ・キアさんがすぐ電話をかけてくれとおつしやっていましたと聞かされたとき、まずほうつておいて差支えあるまいと思つたのである。「文士の方なんでしょう？」とおかみはわたしにたずねた。

「そうです」

彼女はやさしく目を細めて、ちらと電話器をながめた。

「お呼びしましょうか」

「いや、いいんです」

「でも、またお電話をくだすったら？」

「用件というのを聞いといてください」

「かしこまりました」

彼女は口をとがらした。からになったサイフオンをとりあげ、部屋のかたづき工合をすばやく見てとると、出ていった。フェロウズさんは小説の愛読者だった。ロイの書いたものはおそらく残らず読んでいたろう。さっき、わたしが一向に冷淡なのに口をとがらしたのは、ロイの小説を感激して読んだ証拠であった。二度目下宿へ帰ったとき、わたしは脇机の上に、彼女の勇ましい、読みいい筆蹟のメモがのっているを発見した。

キアさんがまたお電話をくださいました。明日お昼食をおつきあい願えませんか。ご都合が悪ければ、ご都合のよろしい日をお知らせ願いたいとのことでした。

わたしはやれやれと思った。ロイとはある会合の席でほんの二、三分間立ち話をしただけで、この三カ月ばかりのあいだ、一度も会ったことがなかった。いつもそうなんだが、そのときもひどく愛想がよくて、別れしなに、おたがいに顔をあわせることが非常に少なく、まったく残念だなどといった。

「ロンドンってひどいところだね。会いたいと思う人に会えるだけのひまがでないんだからね。どうだい、来週中にいつか一緒に飯でも食わないか」

「結構だね」とわたしは答えた。
「帰ったら手帳をのぞいてみて、電話をする

よ」
「結構」

ロイを知って二十年にもなるので、彼がいろいろと約束を書き入れた手帳を、いつもチョッキの左上のポケットに入れているくらいことは、わたしも知っていた。それで、その後彼からなんの音沙汰もなかったときにも、わたしはべつに驚かなかった。それが今頃になって、こんなふうに性急に約束を果たしたいといってくる。ぜんぜん下心がないとは、どうしても考えられないわけであった。寢床にはいるまえに、パイプを喫しながら、わたしはロイが昼食を共にしたいといつてよしそうな理由を、あれこれと心のなかに考えてみた。案外、彼の女性の愛読者がわたしに紹介してくれと口説いたのかもしれない。それとも、二、三日の予定でロンドンを訪れたアメリカの雑誌記者が、わたしに渡りをつけてくれないかと、ロイに頼んだのかもしれない。しかし、あの男ともあろうものが、そんな場合をうまくごまかすだけの機転がきかなかつたとは、いかにわたしでも、そうまで彼を見くびって考えることはできなかった。のみならず、わたしの都合のよい日を選んでくれといつてよこしている。とすると、ほかの誰かに会つてくれというのでは、よもや、あるまい。およそロイくらい世評の高い同じ仲間の小説家に対して、あたりのやわらかい者もなかったが、また、ひとたび不勉強なり、失敗なり、他の小説家の成功なりのために、その評判に暗い

影がさしたが最後、およそ彼くらい思いきりよく冷たい背中をむける男もなかった。作家というものにも運・不運があつて、わたしなどは現在一向に芽が出ていないことは、改めて考えてみるまでもないことであつた。したがって口実をもうけてロイの招待をこわつても、べつに失礼にもなるまいと思われる。もつとも、あの男は一徹な性質で、なにか自分の都合でわたしに会おうと思ひこんだ以上、むきつけに「馬鹿野郎」とでもいってやらぬかぎり、結局こつちが根負けしてしまうことは、わたしもよく知っていた。それに多少の好奇心がないでもなかった。のみならず、わたしはロイという男がひどく好きであつた。

かねてからわたしは、彼が文壇を鰻上りにのぼつてゆくのを、感心して眺めていたものだ。彼の経歴はいやしくも筆をもつて立とうと志す青年の模範とすべきものであつた。あれほどの乏しい才能で、あれほどのたいした地位を築きあげた男は、当今いかに人多しとはいへ、ほかに考えることができなかった。才能といへば、賢い者が毎日もちいるというビーマックスの一包みのように、スプーン匙に山盛り一杯がせいぜいというところだろう。彼はそのへんのことはよく心得ていた。おそらく彼にしてみても、それでもつてすでに三十冊ばかりの作品をものしたといふことは、ときどきは奇蹟とも考えられたに相違ない。トマス・カーライルが食卓の演説で、天才とは努力の異名にほかならぬと述べ

たことを、はじめて読んだとき、彼は白光を放つた。彼の啓示を見たような気がしたことであろう。彼はその言葉をつくづくと考えた。それだけのことならば、おれだって天才になれるぞ。おそらく彼はこんなふうにつぶやいたに相違ない。そして、ある婦人むきの新聞の月評家が、彼の作品の一つを月旦して、感動してこの言葉をもちいたとき（事実最近批評家たちがなにかといえは天才、天才とはやしたるもので、少しくすぐったいくらいだが）、彼は長い時間かかつてクロスワード・パズルをといった男のような満足を感じて、太息をもらしたことであろう。この数年間にわたって、倦まずたゆまぬ彼の勉強ぶりを実際に見てきた者ならば、なにはともあれ、天才になるだけの資格はある男だと認めないわけにはゆくまい。

ロイのスタートはある点で恵まれていたといつてよい。彼は長いこと香港の総督を勤めたのち、ジャマイカ島の知事になって一生を終わつた役人の独り息子であった。ぎつしり活字の詰まった『紳士録』のページのなかに、オルロイ・キアの名を調べてみると、聖ミカエル勳章、聖ジョージ勳章、ロイヤル・ヴィクトリア勳章、聖受、勲爵士レイモンド・キア卿（同項参照）と、インド駐屯軍付陸軍少将故バーシ・キャンパドウン氏の次女エミリア夫人とのあいだに生まるとある。ウィンチエスターを卒業後、オックスフォードのニュー・カレッジに学んだ。学生クラブの会長を勤め、運わるく麻疹にかからなかつ

たならば、ボートの選手になつたかもしれない。彼の大学生活はとくに派手というのではなく、どちらかといえ品行方正で、卒業のときに借金をのこすようなことはなかった。そのじぶんからロイは儉約家で、浪費癖は少しもなく、よくできた息子であった。両親は彼のためにかなりな無理をして、こんな金のかかる教育を受けさせてくれるのだということは、よく知っていた。父親は、退職後は、グロスタシャーのストラウド近傍の地味ではあるが貧乏くさくない家に住んでいたが、ときどきはロンドンへ出て、かつてその政治にたずさわっていた植民地関係の公式晩餐会に出席したりしたが、そういう機会にはいつもきまつて、自分も会員の一人であるアスリーニウム・クラブを訪れるのだった。いよいよ息子がオックスフォードを卒業したとき、からだの弱いある高名な貴族の御曹子の家庭教師の口を、息子のために手に入れることができたのは、このクラブの古馴染みの世話によるものであった。こうしたわけでロイは早くから上流社会に出入する機会をつかんだ。それを抜け目なく利用したことはいうまでもない。だから、彼の書いたもののなかに、単に絵入り新聞の記事で上流社会を研究しただけの人たちの作品を台なしにする、あの馬鹿馬鹿しい誤りはぜんぜんないはずである。公爵ともなればどんな口のききようをするものか、衆議院議員なり顧問弁護士なり三文文士なり側近者なりが、それぞれ、公爵に対してどんな敬語をも

ちいるものかを、彼は正確にわきまえていた。初期の小説のなかで、いとも気軽に、副王、大使、総理大臣、王族、貴婦人などの面々を登場させる彼の手際には、見ていてほれぼれするようないものがある。親切ではあるがえらそうにかまえるところがなく、階級の相違として、そういう人たちでもやはり一般われわれと同じ人間なのだという安心、そうといった感じを彼は読者に与えるのである。わたしはいつもそう思うのだが、近頃ではどうした風の吹きまわしか、貴族仲間のこととは真面目な小説の題材には不向きだというようなことになってしまつて、いつも時代の動きにひどく敏感なロイが、その後の小説では、下級裁判所の弁護士とか、官許計理士とか、農産物仲買人とかの精神的葛藤をもつぱら描くだけになってしまったのは、いかにも残念なことである。こういう社会では、彼の昔の風爽とした面影がないのである。

わたしははじめて彼を知つたのは、彼が家庭教師をやめて、ひたすら文学の道に精進することとにきめた直後で、その当時は姿勢のよい好青年で、六尺豊かな運動で鍛えたらしいからだつき、肩幅は広く、物腰は堂々たるものであった。美青年というのではなかったが、男らしく、好感のもてる顔立ちで、影のない大きな青い眼と、薄茶色の巻毛、どちらかといえ短くて幅びろな鼻と、四角なあごをもっていた。正直で、清潔で、健康な感じだった。運動家らしいよう

すはよそ目にも明らかだった。早い頃の作品のなかで、獐犬の群と一緒に駆けだすところの描写が真に迫っていたのに感心した読者ならば、あれは自分の経験であろうと思わないわけにゆくまい。事実、ごく最近までは、ときどき机を離れて、一日の狩猟に與じていたのである。処女作を発表したのは、ちょうど、文壇人たちがおれたちだって男だというわけで、ビールをあまり、クリケットをやりましたところで、その後数年間は、文士のクリケット・チームのなかに彼の名の見えないためしは、まずなかった。そのうちにこの派の連中は、なんということなしに、そのはなばなしさを失ってしまい、書くものは読まれず、相変らずクリケットはやっているものの、論文を思うつぽの出版屋に打ちこむことは、むずかしいらしいありさまである。ロイはもうかなりまえからクリケットにはみきりをつけ、その後はひとかどのぶどう酒通になりすましていた。

処女作についてはロイは極端に謙譲であった。それは器用にまとめた短篇で、その後に表示したもののすべてに共通した申し分のない品のよさをもっていた。彼はそれに鄭重な手紙をつけて、当代一流と目されるすべての大家に贈呈し、御高風はつとに欣慕していた、御高作を勉強して大いに学ぶところがあつた。魯鈍の身ではあるが、さいわいに先生の驥尾^{きび}に付して進みたい念願であると書き送った。小著を足下に捧呈するのは、師弟の礼をもって仕えたい微衷^{きしゅう}にはかな

らない。未熟な者の愚かな習作に、先生の御繁忙な時間をさいっていただきたいと懇願することの無礼は、よく承知しており、内心忤^こ怩^にたるを禁じえないのであるが、さいわいに御高評と御指導とを賜わるならば、本懐これにすぐるものはない。この手紙に通り返事をよこしたものはほとんどなかった。彼が手紙を出した大家たちは、その讃辭に氣をよくして、かなり長い手紙をくれた。彼らは彼の作品をほめ、午餐に招んでくれた者も少なくなかった。彼らは彼の率直なところが好きになり、その熱心さにはだされた。見ていて可哀そうなくらい謙遜して忠言を求めたり、感に堪えるほどの誠実を顔に浮かべて、その実行を誓ったりするのだった。まったく面倒をみてやるだけのことはありそうな男だ、彼らはみんなそう思った。

小説は大成功だった。こうして文壇関係の友達が大勢でき、しばらくすると、ブルームズベリヤ、キャムデン・ヒルや、ウェストミンスターなどの茶会にゆくと、きまつてパタのついたパンを配ったり、年配の婦人からあいた茶碗をとってやったりしている彼の姿が見られた。年齢は若いし、いかにも明けつ放しな明るさで、ひとがなにか気のきいたことをいうと、いかにも面白そうに笑いこけるといったぐあいだ、誰でも彼を好きにならないうけにいかなかった。ヴィクトリア・ストリートやホウボンあたりのホテルの地下室で、文士や青年弁護士や、リバーティ商会製の絹布を身につけ、襟に飾り玉を

つけた婦人連が集まって、三シリンド六ペンスの夕食を前に文芸を論ずるといったたぐいの、晩飯を食う会などにも彼は加わっていた。やがて、あの男の食後の話はすてきに面白いという評判がたつた。なにしろ氣持のいい男なので、仲間の作家たち、つまり同じ年頃で彼と張りあっている連中も、彼が名門の出であることすらも大目に見るようになった。彼はその連中の乳臭い作品をも口をきわめて称讃するし、原稿を見てくれと頼まれる場合には、なおすところはないではないかと答えてやる。それであの男はいい男だということになり、目が高いということになるのだった。

彼は二番目の小説を書いた。ずいぶん苦心の作で、先輩の忠告がいろいろと役にたつた。編集者とはかねてから知合いの新聞に、頼んで批評を書いてもらえる人も一人や二人ではなかったし、その批評が讃辭をつらねたものであったことも、当然すぎるくらい当然なことであつた。二番目の小説も成功だった。だが、競争者たちの傷つきやすいひがみ根性を刺激するほどのはなばなしの成功ではなかった。あの男もずばぬけたことのできるやつではないと、事實はかえって彼らを安心させたくらいであつた。なにしろいい男ではあるし、鼻にかけるというようなことはまったくないし、偉くなりすぎておれたちの邪魔になる怖れは絶対にない男なんだから、助けてやるのもよからうというわけだった。ところが、今になって昔の見込違いを顧みて苦笑

している連中を四、五人はわたしも知っている。しかし、この頃はお高くとまわっているというの、彼らの思い違いである。若い頃のロイの一番の魅力であった謙遜なようすは、今でも失っていない。

「ぼくがたいした小説家でないことは、自分でよく承知している」と彼はいつもののである。「天才とかなんとかいわれる人たちと比較したら、ぼくなどはまったく物の数にもはいらんくらいだ。以前はよく、いつかはぼくもほんとうの意味ですぐれた小説が書けると思っていたものだが、今ではそんなことは夢にも考えやしない。ぼくがわかってもらいたいのは、ただぼくはぼくなりやにせいっぱいやっているというだけのことだ。じっさい真剣にやっているのだ。いい加減なことはけつしてやっていない。ぼくはまあ自分で、面白い話は書ける、生きた人物はつくれる男だと思っている。結局、ものものまい、まずいは食べてみるのが一番じゃないかな。『針の孔』は英国で三万五千、アメリカで八万売れた。つぎの小説の連載版權はこれまでにない大きなものだ」

今でも彼は小説の批評家に手紙をやつて、ほめてくれた礼をいい、午餐に招いたりしているが、それらもつまりは謙遜のなすわざではないだろうか。いや、そればかりではない。たまたま辛辣な批評を浴びせる者があると、事実、文名大いにあがつて以来のロイはことに、聞くに堪えない毒舌を忍ばなければならなかったが、そ

んな場合に彼は、われわれのように単に肩をすくめて、作品の悪口をいった男を心のなかで軽蔑し、やがて忘れてしまふというのではなく、その批評家に長い手紙を送り、拙著を面白く思われなかったのはまことに残念である。しかし、あの批評は批評としてみて非常に興味があり、それに、こう申しては失礼だが、高い批評眼と、言葉に対するすぐれた感覚とを示しているように考えられ、あえて一書を呈する気持になった。絶えず向上を怠ることに依りては人後に落ちず、また、忠言に耳を傾けるだけのやわらかい頭はまだ失っていないつもりである。無理に御迷惑をお願いするのは本意でないが、もし御都合がつかぬらば、水曜日か金曜日にサヴォイへ昼食をとりにお出でいただけないだろうか。その前に拙著がなぜ面白くないか、御高説をどくと承りたい。昼食の注文をさせたら、ロイの右に出る者はない。それで大体において問題の批評家が牡蠣を六つくらいと、仔羊の鞍下肉を一きれも食べる頃には、まえにいった悪口も一緒にのみこんでしまっているのが落ちで、ロイのつぎの小説が出ると、くだんの批評家はその新作のなかに驚くべき進歩のあとを発見するの、いわば、めでたき天の配剤である。

人間が世渡りをしてゆくうえに面倒なことのひとつは、昔は親しくしていたが、今ではすっかり興味のさめてしまった友達を、どうするかの問題である。当事者双方がたいして高い地位にいない場合には、仲違いも自然にできて、あ

と口も悪くないが、一方が出世しているとなると、なかなか厄介である。新しい友達が大量できても、古くからの連中は容赦してくれない。用事が山ほどあつても、まずおれたちの用事が先だということになる。いつでも二つ返事でいうことを聞いてやらないと、大げさに嘆息して肩をすくめ、こんなことをいう。

「そうかい。きみもやっぱり同じなんだな。成、功したから、お交際はご免だというんだろう」もちろん勇気があれば、それがこちらの本音なのだが、あいにくと、それだけの勇気がない。そこで意気地なくも日曜日の夕食に招かれてゆくことになる。昼のあいだに焼きすぎた焼肉は濠州産の牛だそうだが、冷めきつて板のようだし、ブルゴーニュ産の赤ぶどう酒は——ああ、しかし、そもいかなる理由で、彼らはそれをブルゴーニュ産の赤ぶどう酒と呼ぶのであろうか。いったい彼らはボニーヌへ行つたことも、ホテル・ドゥ・ラ・ポストに泊まつたこともないのであらうか。屋根裏の部屋で一塊のパンを分けあつた懐かしい昔を語りあうのは、もちろん、すばらしいことである。しかし、現に坐っている部屋が、屋根裏の部屋と選ぶところが無いのを考えると、そぞろ臀のあたりがそこそばゆるくなるではないか。一向に本が売れないとか、短篇小説を売りこめないとか語るのを聞くと、なにか気がとがめて、落ちつけなくなってくる。支配人のやつは、おれの戯曲を読んでもくれないのだ。舞台にかかつているろくでもない作品とく

らべて考えると、實際ひどい仕打ちだと思ふ。
 (こういつて彼らはじろりとこちらの顔を見
 る。)これには困つて、目をそらすよりほかに
 ではない。そこで、人生がかならずしもわれわ
 れにはほえんでばかりいてくれたわけでないこ
 とを理解してもらうために、いきおい今までの
 苦勞を誇張するということになる。書いたもの
 例にひく場合などに、せいぜい遠慮して、くだ
 らないものだがという、案外それが彼らのい
 いたいことであつたりして、大いに面くらつて
 しまふ。観客はむら氣だからと力説して、われ
 われの人氣も長続きするわけがないと考へても
 らつて、わずかに彼らの鬱憤をはらしてもらふ
 始末だ。親しいようである、彼らの批評はな
 かなか辛辣である。

「きみの近作はまだ読んでいないが、そのまゝ
 のやつは読んだよ。なんとかいゝつたつけね」
 そこで題名を教える。

「読んでみてむしろがっかりしたね。今までの
 ものにくらべて、かなり落ちるんじゃないかな。
 ぼくの好きな作品は、もちろん知つてゐるだろ
 う」

こういう言葉は他の男からもたびたび聞か
 されてゐるので、すかさず最初に発表した作品の
 名前をあげる。当時は二十歳の若さで、生硬、
 未熟、かけだしの悲しさがどのページにも浮き
 でゐるのだった。

「あれくらいのものは、もうきみには書けない
 のだらうなあ」と彼らは心から嘆息する。まる

で、これまでの苦勞は、あのまぐれあたりの作
 品から、一步一步墮落するための苦勞であつた
 といわねばかりである。「あの頃のきみが示し
 たはなばなしの将来は、すこしも実現していな
 いとしか思えないんだが」

ガスの火は足を焦がすばかりであるが、手は
 氷のように冷たい。それとなく腕時計に目をや
 つて、まだ十時にしかならぬが、帰るといつた
 ら、氣を悪くするだらうかと考える。車には街
 角をまがったところで待つてゐるというつて、
 彼らの貧乏暮しに恥をかかせまいつもりでいた
 のに、玄關まで送つてきて、こんなことをいう。
 「この通りを出たところにバスがあるからね。」

まあ、そこまで一緒に行く

これにはすっかり参つて、車が待つてゐるは
 ずだからと白状する。わざわざ街角をまがった
 ところに車を停めておくのは変じゃないかとい
 う。なに、運転手の癖なんだと答える。車の待
 つてゐるところまでゆくと、彼らはことさらに
 なんだという顔をして、じろじろと見る。こちら
 はへんに落ちつかなくなつて、いつか夕食を食
 べにこないかと誘う。そのうちに手紙を出して
 打ち合わせようと約束して、車を走らせながら
 クレアリッジにきてくれといつたら、ご大層だ
 と思うかしら、ソホウにしたら、けちくさいと
 いうかしらと、いらいらする。

ロイ・キアにはこういう苦しみはない。利用
 できるだけ利用して、そのあとは鼻もひっかけ
 ないといつては、少々ひどい言い方かもしれな

い。しかし、もっと上品にいうとすれば、ほ
 のめかしたり、ぼかしたり、あたりさわりのな
 い例をひいたり、やわらかく冗談めかしたり、
 それはそれは面倒で、ずいぶん肩のこる工夫が
 いる。だからわたしは結局それが事實である以
 上、なにも色をつけることはないと思う。たい
 ていの人間ならば、非紳士的なことをやる場合
 には、相手の人に氣まずい思いをするものだが、
 ロイの心臓は、いつも狂いが無いと見えて、そ
 んなくだらな感情にとらわれない。さんざひ
 どいことをしておいて、氣まずさはこれほど
 感じないのだ。

「ああ、スミスのやつね」と彼はいうのである。
 「あの男は可愛い男さ。ぼくはあの男が好き
 なんだがね。この頃はますますいらいらしてゐる
 ようで、氣の毒だ。なんとかしてやれないもの
 かなあ。いや、ぼくはこの数年会わないんだが。
 昔の友情をつづけようと思つても、駄目なんだ。
 おたがい苦痛ばかり多くつてね。つまり、大
 勢のなかから一人がずばぬけて出てゆくものな
 んだ。これは認めるよりしかたがないよ」

だが、もし帝國美術院の招待日などで、たま
 たまスミスにぶつかるようなこともあると、
 およそ彼くらいのお世辞のよいものはいないので
 ある。スミスの手を固く握つて、会えてほとん
 とによかったという。顔ははればれとかがやく。
 まるで親切な太陽が光線を降りそそぐように、
 友情をあびせかける。このすばらしい生き生き
 とした光にスミスはすっかり上氣して、ロイの

やつはおれの近作のせめて半分くらいの作品が書けたら本望だといったよ。あれはいい男だねという。ところが、自分のいることにスミスは気がついていないなと思うと、ロイはよそを向いてしまう。だが実際はスミスはロイのいることを知っていて、無視されたことに腹をたてる。スミスはなかなか口の悪い男で、ロイのやつ、昔は薄汚いレストランで一皿のビフテキをおれと分けあったり、セント・アイヴズの漁師の家で一カ月を一緒に暮らしたこともあったくせにという。ロイのやつは世間の人気取りばかりやっていると。あれは俗物だという。あれは山師だという。

この点はスミスの誤解である。オルロイ・キアの性格のうちでもっとも目立つものは彼の誠実である。誰だって二十五年間もつづいて世間をだましおせるものではない。およそ人間のする仕事のなかで、何がむずかしいといって、偽善くらいむずかしい、気骨の折れるものはない。なにしろ、四六時中用心していなければならぬし、よほどの図太い落ちつきがなければならぬ。姦通とか暴食とかと違つて、都合のよいときにやるというわけにいかない。かかりつきりになつていなければならぬ仕事である。それに、もう一つ、皮肉なニューモアがある。なほロイはなにかという大口をあいて笑うが、ニューモアに敏感だとはいえないと思うし、皮肉のできる男では絶対でない。わたしは彼の小説で終りまで読んだものはほとんどないが、

それでも読みかけたものはかなりたくさんあり、彼の誠実が膨大なページのすみずみまでよくゆきとどいていてと思つてゐる。彼の人気のゆへがない原因は明らかにそこにある。ロイはいつでも、世間の人たちの信じていることを、本心から信じてゐるのだ。貴族社会の小説を書いてゐたときは、貴族というものは道楽で身持ちが悪いが、どこかにあらそえぬ氣品があり、大英帝国の指導者としての素質を生まれながら持つてゐると心から信じてゐたし、のちに中産階級のことを小説に書いたときは、中産階級の者こそ国家の柱石であると本気で信じてゐた。彼の書く悪漢はわるもので、英雄は雄々しく、乙女は清纯といふことに、いつでも相場がきまつてゐた。

ロイがほめてくれた批評家を午餐に招ぶときは、心からその讃辭に感謝してゐるからであり、悪口をいって批評家を招ぶ場合は、本気で自分の欠点を改めたいと思つてゐるからである。未知の愛読者がテクサス州や西部濠洲あたりからロンドンへ訪ねてきた場合に、美術館へ案内するのは、読者を啓発するためもあるが、それよりも彼らが美術に対してどう反応するかを観察したいと、本気で思つてゐるためである。もしまだ彼の誠実さに疑問をもつ人があるなら、彼の講演を聞いてみるがよい。

上手に夜会服を着こなしたり、もしそのほうがよいと思へば、かなりくたびれてはいるが仕立ては申し分のない、ゆつたりした感じの背広

服を着用に及んだりして演壇に立ちあがり、真剣な面持ちで、悪びれずに、といつてもあの好ましいはにかみも適当にまじえて、おもむろに聴衆を見わたす彼の姿に接するならば、誰だつて彼が本氣になつて仕事に打ち込んでゐると思ふにないわけにいかないだらう。ときおりは、言葉につかえたようなうすを見せることがあるが、それは言葉の効果をもより大きくするための技巧である。彼の声はゆたかで、男性的で、話術は巧みで、だれることがない。好んで英国やアメリカの新進作家を論ずるのだが、いかにも大家らしい雅量を示して、熱心に彼らの長所を説いてやまない。あまりに多くを語るきらいがないでもないが、ともかく彼の講演を聞くと、新進作家について知りたいと思ふことはみんな知つてしまつたのだから、あらためて彼らの作品を読むことはないといつたような氣持になる。

ロイが地方の都会で講演をすると、その後は、彼が論じた作家の作品はただ一冊も売れないで、いつても彼の作品に注文が殺到するのには、おそらくこのへんに原因があるのだらう。彼の精力は恐ろしいほどで、アメリカを何度も講演してまわつて成功をおさめたばかりでなく本国の英国でも席のあたたまる暇がない。たとえばどんなに小さいクラブでも、どんなにくだらぬ修養団体でも、ロイは二つ返事で多忙な時間の一半をさく。ときどきは講演に筆を加えて、こぎれいな書物にして出版する。『近代の小説家』とか、『ロシアの小説』とか、『作家論』とかい

う表題の書物に、その方面の興味をもつ人ならばたいしては、少なくとも目くらはいとおしていろいろが、そのなかに文学への愛情と、好ましい人柄とがうかがわれることは、まず否定できないだろうと思う。

彼の活動はけっしてこれだけではない。著作家の利益を擁護し、病氣または老齢のために生活が困難を加えた場合に、その不幸を慰める目的で創立された協会の有力なメンバーでもあった。著作権に関する事項が法律の問題になった場合は、いつでも進んで応援に出るし、よその国の作家たちと交誼を結ぶ目的で、外国へ使節を派遣するときには、きまつて一役を買って出た。公式晩餐会で文学を代表して一席弁ずるのも彼だったし、外国の著名な文学者を歓迎するために委員が選ばれる場合にも、彼の名の洩れた例はなかった。パザーがあれば署名入りの彼の作品が少なくとも一つはかならず出たし、面会を申し込まれてことわったという話は、まだ一度も聞かない。文筆稼業の憂さ、つらさは誰よりもほかがいちばんよく知っているのだ、たまさかばくと会って、愉快におしゃべりをして、それで生活難に苦しむ雑誌記者が二、三ポンド稼げるとなれば、ほかにはとてもことわるだけの勇氣がもてないという彼の言葉は、誰に聞かしても立派なものである。彼は訪問記者をたいていはお茶に招待して、いつも好感を与えた。記事を出すまえに一応見せてもらいたいというのが、彼の持ちだすただ一つの条件だった。勝

手な時に知名の士を電話に呼びだして、読者に知らせたいのだが、あなたは神を信ずるかとか、朝は何を召し上がるかなどと質問する連中に対しても、彼は怒ったことがなかった。「諸名家解答欄」にはいつも顔を出すので、世間では彼が禁酒、菜食主義、ジャズ、にんにく、運動、結婚、政治、さては家庭における婦人の地位などについてどう考えているかを知ることになる。

彼の結婚観は抽象的であった。というのは、彼は芸術家が真剣に仕事に打ち込むとする場合に障礙になるような状態を、これまでうまく逃れてきていたからである。数年のあいだ彼が身分のある人妻にむなしい思いを寄せたことは誰でも知っていた。その女のことが話題に上ると、いつも騎士らしくきれいな口をきいていたが、かなり手痛く振られたといううわさだった。中期の小説に彼としては珍しい闊々の色が濃いのは、その苦しみの反映であった。そのとき受けた心の痛手のおかげで、熱狂的なフアンが集まりにはつきもの、あやしげな贈り物をたねに人気作家と結婚して生活の安定をえようとする、かなり評判のよくない婦人たちの誘惑を、相手の気持を悪くさせないで、上手にかわすことができるようになった。つまり、彼らのかがやく瞳のなかに結婚登記所の影がさしはじめると、彼は、心のまことを捧げつくした昔の恋愛の思い出が邪魔になって、二世をいいかわす気持にはどうしてもなれないのだというのである。このドン・キホーテみたいな馬鹿馬鹿しい心中

立てに、彼らはひどく腹を立てるだろうが、侮辱された気持にはならない。家庭の楽しみや子供をもつ満足は永久に自分のものでないと考えると、少なからず憂鬱であるが、わたしの理想のためばかりでなく、おそらくはわたしと喜びを共にしてくださるであろうあなたのためにも、その犠牲は忍ばなければならないのだといって、彼は溜息をもらすのであった。文士や画家の細君は世間で醗陶しているものだらけのことは、彼はとうから心得ていた。どこへ行くにも細君同伴で出かける芸術家は、やがて鼻つまみものになり、行きたいところへも招んでもらえないことになる。といって、細君を家に残してゆくと、帰る早々恨みごとを浴びせかけられ、精魂をかたむけて仕事をするために必要な心の平静がめちやめちやになる。オルロイ・キアは独身であった。五十歳になる今でも妻を迎えるようすはなかった。

彼は一人の作家がどの程度までやれるものか、勤勉と常識と誠実と、さらに手段と目的とを上手に組み合わせることによって、どこまで出世できるものかを身をもって示した男である。彼は愛すべき男で、よほどのつむじまがりでもないが、あんなに成功して癪だという者はないだろう。心に彼の姿を思いうかべながら眠ると、きつと安眠ができるとうわたしは思っている。わたしはフェロウズさんへの伝言を走り書きして、パイプの灰を落すと、居室のあかりを消して、床についた。